

「人斬り」と幕末政治

——土佐藩山内家の政治運動と個性——

笹 部 昌 利

はじめに

「土佐勤王党の勃興は殆ど維新史料中の一大奇蹟なり。」

これは幕末維新期の土佐藩山内家、なかでも武市半平太（瑞山）ら土佐有志を考察する際、必須の史料とされてきた瑞山会編『維新土佐勤王史』其一の冒頭の一節である。天文年間、周防山口の大内氏に仕えた南村梅軒によって朱子学一派が土佐国に伝えられ、「南学」と称された。近世に入り、一度は潰えかけた南学を神道的解釈のもとと再興させた谷秦山の信念。この信念が具現化されたものとして、土佐有志（土佐勤王党）を位置づけ、その「皇国的信念」により発せられる運動こそが、正当であると意味づけるための一文である。

日本近代に編まれた歴史書においては、幕末維新期における人間の言動はすなわち、それがいかに「皇国的」であるかに重きが置かれた。ゆえに土佐有志こそ、正義だと述べる『維新土佐勤王史』の叙述方法は決してイレギュラーなものではない。しかし、このような幕末維新に根ざした固定観念は、人物や組織それぞれの姿、形、動きのありようにベールをかけ、見えにくくさせてしまったばかりか、それぞれのオリジナリティーが捨象され、「尊王」「攘夷」というようなイデオロギーのみがひとり歩きをはじめ、そのような枠組みが政治の場に身をおいた存在を包括してしまう形となった。人物や組織がイメージで語られるというのは概してこのようなことを指す。

たとえば、「志士」とはなにかと問うた際、「志士」という言葉が、日本近代から幕末維新という時代を振り返った折に、その時を生きた人間の言動を称えるために使われたものであることなどは氣にとめられることはない。その興味はもっぱら、尊王攘夷から倒幕へと向かうとあらかじめ設定された枠組みのなかにおいて、その先駆性、急進性、そして明治維新への貢献度に向けられた。高木俊輔は、「志士」という存在について身分、出身を問わず網羅的に取り上げ、「志士」によって転回された「草莽運動」を考察することで、明治維新という時代変革のありようを問うた。⁽³⁾ 幕末維新期の「志士」について、これほどまでに正面から取り組んだ歴史学研究は現在に至るまで、管見の限り存在しない。だが、そこで貫かれる思考の枠組みは先述した幕末維新史に先天的に根ざす固定観念に沿うものであり、示される圧倒的な情報量にそぐわない解釈になっているように思う。特に、「天誅」という事象を「テロリズム」と解していることなどは、「志士」的行動をイメージで解しているところからくるものである。

ゆえに、「志士」と呼ばれた人々の行動論理を解くことが最終的な目的となろうが、そのすべてを論及することは紙幅の都合、困難である。よって本稿では、「天誅」という事象について考える。素材として、土佐勤王党を名乗った土佐藩山内家有志の政治運動を取り上げたい。幕末期に京都、大坂でおこった「天誅」という事象が、「志士」的行動論理のありようを示す良質なテキストであるからである。

一、「志士」的行動の背景と「人斬り」

1、背景としての庄屋・郷士の「志」

「志士」的行動を問う前に、土佐有志の歴史の変遷について触れておく。ただし、平尾道雄によるまとめた業績⁽⁴⁾があるので、その概観にとどめることにしよう。

幕末期に土佐から出た「志」は、戦国期に「一領具足」と呼ばれた人々よりつながる。戦国大名長曾我部家に属する武士団であつた彼らは、平時は農業を営み、その傍らにわらじや腰兵糧をくくり付けた槍と具足を置き、有事合戦となるや、それらを纏い戦場に赴くという、言わば半農半兵の人々であつた。山内一豊の入封に際し、一揆を組織して抵抗するも鎮圧され、土佐国の各所に散在していった。あらたな国主となつた山内家は彼らに対して宥和的措施をとり、あるものは仕官し、あるものは帰農した。仕官したものは士分を与えられることなく「郷士」に。帰農したものは、地域に根付いて「庄屋」となつた。

山内家は、家臣団および地域支配に対し、他の大名家に比して強烈な身分格式の論理をもちいたといわれる。「上士」と「下士」。上下の別による格の壁は予想以上に大きく、それは郷士身分を含む「下士」に上昇志向すら抱かせないというものであつた。

しかし、近世における流通・経済の発展はすなわち、地域と商人の富裕化をもたらした。そんななか、為政者側が施策転換をおこなうと、たちまち地域のなかにこれに対する疑念と矛盾が芽生え、そして上昇志向を生み出した。具体的には、元来、郷士は地域の庄屋の管轄化にあつたが、寛政年間に指揮命令系統も藩直属となり、郷士身分を地域の豪農が取得する事態が生じ、郷士が庄屋の地域管理の枠組みから外れる傾向が生まれた。一村の管理をおこなう、地域の代表であつた庄屋は、他の村の庄屋役を兼ねるか、あるいは一定期間転勤して、赴任地の管理にあたるという村役人的な存在となつていった。

このような自己矛盾に陥りそうな状況において、庄屋層は天保十二年（一八四一）、「同盟談話之条々」五二ヶ条によつて結束し、庄屋という存在が地域において、いかにあるべきかを問い直す。土佐国梶原村（現、高知県梶原町）の大庄屋を務め、のちに天誅組大和義孝の中心的人物となる「志士」吉村寅太郎は、庄屋がいかにあるべきかを、「同盟談話之条々」を引用しつつ、次のように述べる。

凡そ一天四海の内、棟梁は唯一にして、当時受け継ぐ処三段に別けて姑く是を合せて四等と言うべし、其の総王はかしこくも天皇尊、御代官は將軍、御与頭は諸大名、是を烹鮮の職と言う、小頭は庄屋にて土地人物の総宰を預り申候（以下略）^⑤

天皇を「一天四海」の「王」とし、將軍は代官として統治を代行し、これを大名が助ける。そして、大名を助け、土地人民を預かるのは庄屋であり、このようなシステムがあるからこそ、日本近世において社会が存在しえると説く。庄屋が国政を支える極めて重要な存在であるとする彼らの自己認識は、文久元年（一八六一）八月、武市半平太（瑞山）^⑥、大石弥太郎らによつて起草された有志盟約書にも繼承される。武市はこのとき二度目の在府。一度目は、劍術修養を主とする書生にすぎなかつたが、文久元年四月、江戸到着以降、精力的に在府の他藩士と交流を持ち、土佐山内に仕える身分、それがたとえ低格であつたとして、いかに動くべきかを問うた。

堂々たる神州戎狄の辱しめをうけ、古より伝はれる大和魂も今は既に絶えなんと、帝は深く歎き玉ふ、しかれども久しく治れる御代の因循委惰といふ俗に習ひて、独りも此心を振ひ挙て皇国の禍を攘ふ人なし、かしこくも我が老公夙に此事を憂ひ玉ひて有司の人々に言ひ争ひ玉へども、却てそのために罪を得玉ひぬ、斯く有難き御心におはしますをなど此罪には落入玉ひぬる、君辱かしめを受ける時は臣死すと、況むや皇国の今にも枉を左にせんを他にや見るべき、彼の大和魂を奮い起し、異姓兄弟の結びをなし、一点の私意を挟まず相謀りて国家興復の万一に裨補せんとす、錦旗若し一とたび揚らば團結して水火をも踏まむと、爰に神明に誓ひ、上は帝の大御心をやすめ奉り、我が老公の御志を継ぎ、下は万民の患を払はんとす（以下略）^⑦

「戎狄」（西洋諸国）の風俗になかば泥んでゆく傾向を断ち切るべく、われわれは一点の私意も挟むことなく共に同じ、国家復興に立ち上がる。この武市の呼びかけに一九〇をこえる「志」が集まり、土佐有志集団、土佐勤王党が結成される。そこには、このち長州に身を置き、国事周旋に尽力する土方楠左衛門（久元）や、前述の吉村寅

太郎のほか、いまだ自らの行く先を見いだせずにした一青年、坂本龍馬の姿もあった。庄屋同盟の「同盟談話条々」で説かれた、庄屋は將軍、大名と同じく天皇の臣であり、為政者たる武家の非道に対しては、「王民圧迫」を強調して、武力行使をおこなうことを正当化する論理は、武市ら土佐有志による世情判断と動向のリアリズムとなつてあらわれる。

2、「志士」と「人斬り」

「人斬り」が政治の活路となる。これを決定づける大きな事件があつた。安政七年（一八六〇）三月に起こつた大老井伊直弼殺害事件、一般に「桜田門外の変」として知られる。周知のとおり、安政五年（一八五八）から翌年にかけて執行された、徳川公儀に反する言動をとる者を処罰肅清した「安政大獄」とよばれる弾圧政策や、それからむ諸侯および公家の謹慎処分、さらには安政五年六月、アメリカを皮切りに西欧五カ国と結ばれた通商条約に怒りを顕わにした孝明天皇が水戸藩徳川家に送つた、今後の国政運営は全国諸大名を含む衆議によるべしとの勅諭、いわゆる「戊午の密勅」の返納をめぐる問題が、それを巻き起こしたいくつかの理由とされる。

直弼襲撃に参加した水戸浪士の一人、斎藤監物が、老中脇坂安宅屋敷に自首した際に提出した「斬奸趣意書」は、義挙決行の理由をものがたる。

ペリー艦隊が浦賀に来航して以来、徳川公儀の処置は、時勢の変革を標榜するものの、諸外国の虚喝に恐怖しており、通商条約を結んだうえ、領事の永住を認めることなどは、「実に神州古来の武威を穢し、国體を辱しめ、祖宗の明訓孫謀戻り候」と評し、失政の根源を「將軍家御幼少の砌に乘じ、自己の權威を振はん為、公論正義を忌憚」る井伊直弼の「所業」とし、「斯る暴横の国賊、其儘指置候は、ますます公辺の御政體を乱り、夷狄の大害を成し候儀、眼前にて実に天下の安危存亡に拘り候事故、痛憤難黙止、京師へも及奏聞、今般天誅二代り候心得に

て令斬戮」のであると。

彼らは「公辺へ御敵対」するべく動いたのでは「毛頭無」いと述べる。同じく提出された「存意書」において記される、「千古の英見卓識にて」築かれた「諸蛮夷の御扱振」を改編し、「耶蘇の術中に落入り、神州の泰否にも拘」る事態を招いた徳川公儀の政策を批判する。政務を預かつた直弼は、彼らの矢面に立たされる形となつた。「専ら虎狼の猛威を以て天下を屏息せしめ」た直弼は、「北条・足利の暴横に均しく、共に天を戴かざる国賊」であり、「実に神州の逆賊」であるとされ、「天地神人同憤の時に乗じ、天下諸藩の同志と合力同心して、天下の奸賊を誅伐し、神罰」を与えるのであると理由づけられた。

彼らは、自らを、『論語』にいう「志士仁人」であると認識した。彼らのおこないは、「横議横行」（ヨコシマな議論や行動）と評され、世が世ならば、公権力の取り締まりの対象とされたが、近世後期から幕末という時代は、「横議横行」をある程度は許さざるをえない社会状況にあつた。「志士仁人は求めて仁を害することなし、身を殺して以て仁を成すところあり」との、あるべき人道論は、当時の社会情勢を批判するものたちが、「有志之士」として動いていく際の証し、行動を理由付けるためのタテマエとなつたのである。彼らは、徳川公儀への政治不信と憤懣を、東照大権現より受け継がれた徳川将軍家、さらには「天」にまで波及させ、この全責任を井伊直弼個人の政治的言動に問うたのである。

「天」とは、儒教における宇宙万物が生じる根源的存在である。^⑨ 人類は「天」によって、自主性を付与され万物の霊となり、生存する。「天」により「命」を被ること、為政者は真の為政者たりえた。日本における儒学、これへの対抗として生成された国学の需要は、万物の根源たる「天」の読み替えと批判によつて深化された。「志士仁人」の行動は、「天」によつて、公的論理を得た。たとえば、その行動が私欲から生じたものであつても、彼らの掲げた「天」によつて「公論正義」に転じたのである。このような「志士仁人」によつて生み出される公共的

論理とこれにより生成される公共空間において、政治運動は正当化されて展開され、また、「天」によって人が裁かれる論理に基づき、「人斬り」が政治の活路となりえたのである。

幕末期に生成された「志士仁人」のための「志士」的公共性は、民衆をも取り込んだ。それは「井伊掃部（いかもん）良い鴨」と雪の寒さに首を絞め、「井伊掃部を網で捕らずに駕籠で捕り」との戯れ歌が詠まれたことからもわかりえよう。

二、政治のなかの「天誅」

1、土佐有志と「人斬り」

土佐においても、政治の活路が模索されはじめていた。安政四年（一八五七）から翌五年にかけて、藩主山内豊信は、十三代將軍徳川家定の継嗣問題と、安政五年六月、日米修好通商条約締結の可否をめぐる国政方針について、越前藩主松平慶永、水戸藩主徳川斉昭ら諸侯グループとともに、一橋家当主、徳川慶喜の継嗣擁立を目論む、いわゆる「一橋派」を形成し、徳川譜代第一の閥閥、井伊直弼を首魁とする徳川公儀執行部と対立した。周知のとおり、豊信らの運動は、徳川公儀執行部の推す紀州藩主徳川慶福が継嗣に擁立され、安政五年七月の家定死後、慶福の十四代將軍就任の決定にともないたちまち瓦解した。慶喜、慶永、斉昭らが謹慎処分到处せられると、豊信は徳川公儀からの内々の勧めに応じ、安政五年十一月、隠居を願い出、翌六年三月、これが許可され、養嗣子豊範への家督相続が認められた。加えて、同年十一月には謹慎が命じられた。

「容堂」と名乗り、江戸品川の山内家屋敷にて謹慎していた豊信は、吉田東洋の才知に全幅の信頼を置いていた。奉行職を辞して京坂に遊び、在京一流の学者と交わった東洋を豊信は用い、嘉永六年（一八五三）七月に大目付、

ついで十二月に仕置役（参政）へと昇進させた。翌安政元年三月、藩主面前での不敬行動を罰せられ、罷免されるも、安政四年十二月、再度仕置役に登用されるや、東洋は、後藤象二郎、乾退助（のち板垣退助）、福岡藩次（のち孝弟）ら、自らが失脚中に教育した門弟を登用して、律令編集、文武振興による法制・教育および大名家格制度の改革を推進した。^①

吉田東洋による藩政改革のありようは、教育と「海南政典」編纂にみられる法整備を二枚看板とし、藩政運営を根本から再構成するという抜け目の無いものである。ただ、実際に推進していくには、教育機関（文武館など）の建設にともなう莫大な経費と時間を有した。他藩有志との交わりのなかで多く知見を得た武市ら土佐有志は、東洋の施策を時勢にそぐわない、立ち遅れの策と見なした。武市による再三の建言も水泡に帰し、吉田東洋はいよいよ土佐有志の障害となった。薩摩藩の島津久光が率兵にて京都、そして江戸へとその歩を進めていた文久二年（一八六二）四月、いまだスタートすら切れない閉塞状況において、彼らは「人斬り」を決断した。

高知城下の西のはずれ、雁切橋畔にさらされた吉田東洋の梟首には、次の斬奸趣意書（「吉田元吉ノ罪状書」）が添えられていた。

此元吉事（吉田東洋）、重キ役義ニ有ナガラ、心儘成ル事を取行、天下不安の時節ヲモ不顧、一日モ安氣ニ暮度所存ヲ以、御国次第ニ御窮迫之御勝手ニ相成候モ乍悟、表ハ御余銀モ有之候様都合能申飾り、既ニ先年ヨリ御困ヒ相成居候粃米追々存分摺尽シ、御国内御宝山不殘切拂、何に不寄下賤之者ヨリハ金錢嚴敷取上、御国民上ヲ親ミ候心ヲ為相隔、自分ニライテハ賄賂ヲ貪リ、無類ニ驕ヲ極メ、於江戸表輕薄之小役人へ申付、御名ヲタバカリ、結構成銀之銚子ヲ相調、且自己之作事平常之衣食住弥華美ヲ極メ候事モ此儘差置候テハ士民之心弥相離レ、御用ニ立候者一人モ無之様相成、御国滅亡之端トモ相成候ニ付、不肖之我輩共無余儀堪忍難成上ハ国患ヲ下ハ万民之艱苦ヲ救フ為メ、己之罪ヲ忘レ如此取行ヒ、尚又サラシオクモノ也^②

斬奸の論理としては、井伊直弼斬殺の際と酷似している。東洋が「重キ役儀ニ有ナガラ心儘成ル事を取行」ない、「賄賂ヲ貪リ無類ニ驕ラ極メ」ると私利私欲の政治であると評し、このままにしては「士民之心弥相離レ御用ニ立候者一人モ無之様相成、御国滅亡之端トモ相成」と大名家および大名領国全体の問題へと波及させている。そして、「上ハ国患ヲ下ハ万民之艱苦ヲ救フ為メ」に斬殺し、「サラシオク」。「料理した血を見に行や初鯉、鳴てもしれぬ首打のゆきさき¹³」という、詠み人しらずの落首狂歌からも世情への波及効果がうかがえる。異なる点といえば、彼らが、斬奸の主体を「天」としなかったことである。個々人の思想的な違いや、大名支配内部での出来事であったことも無関係とはいえない。しかし、直弼が斬られた安政七年と、東洋が斬られた文久二年では、斬奸者をとりまく政情が激変していた。全国の「志士仁人」による有事への期待が、京都・大坂そして伏見を「天」の許しうる公共空間へと変えた。彼らは「脱藩」によって、既成の封建的枠組みを抜け、公共空間へと移動し、闇に紛れた。京・大坂の闇は「義拳」という命題のもと、「脱藩」という当時の大罪すらもみ消すほど公共性に満ちていた。ともあれ、吉田東洋を斬ったことは、土佐山内において武力行使による政策修正がまかりとおった瞬間となったのである。

2、「志」の上京

吉田東洋亡き後の土佐藩政執行部は、執政、参政、側役、大目付とすべての職が総入れ替えとなった。東洋の死によって、改革路線が頓挫したことへの引責辞任の形である。新たな執行部には、東洋に反対し要路から遠のいていた奉行職の五藤内蔵助や、同職山内下総、桐間蔵人らが復帰した。また、この人事によって、武市ら土佐有志と政治的に共同していた山内民部（豊簪）・山内兵之助（豊積）ら山内分家門閥層の政治的発言力が増し、土佐有志と「志」を同じくした上士、小南五郎右衛門、平井善之丞らが大目付職に任じられたことは、武市らの企画意図が藩政執行部に幾分通りやすくなったことを意味しよう。

ともかくも、確かなことは、「人斬り」によって、政治権力のありようが簡単に転換したこと、そして、吉田東洋亡き後の土佐藩政が、薩摩、長州など西南雄藩同様に、京都政局への対応を第一としはじめたことであつた。

さて、薩摩藩主の父、島津久光が率兵にて入京を果たす。目指されたは、大名家が国政参加できうる政治状況を徳川公儀に認めさせるという、亡き兄島津斉彬の遺志を実現させること、そして、率兵上京をおこなうことで、藩内政治を島津宗家、ひいては久光が完全掌握することであつた。¹⁵そして、この久光の政治的投機が、他大名家における国政への政治的関心を高め、これにつづいて、天皇の住まう京都へといたる道のありようを提示したことも、当時の政情を紐解く上で重要なことである。

前藩主容堂の実弟で、武市ら有志の理解者であつた山内民部は、若年の藩主山内豊範を諭し、あるべき土佐藩山内家の政治姿勢を示した。文久二年六月十七日付、「存意書」¹⁶には、藩論を「勤王攘夷」に定めるにあたり、「如何程徳川家の御恩これあり候共、徳川家を主君とは申され間敷、且又幕府天朝を蔑如し奉り候義これあり候得ば、天朝を守護し、幕府に向かい弓を引き申すべき事当然」であり、真の「君臣の大義」を結びなおすべきと述べる。そのためには、参勤交代で上府する際、「京師へ御立寄り遊ばされ、勤王攘夷の御趣意仰せ立てられ、薩長へも同様仰せ込まれ、家老中一人不時の御手当として京師へ指留められ、其上関東へ御下り遊ばされ、幕府へも同様、公武御合体、尊王攘夷の義仰せ立てられ、其上幕府御承引これ無く候えば、最早幕府への御義理も相立ち居り候御事故、早速御上京遊ばされ、薩長のごとき忠義の国と御心を合わせられ、京畿御守護遊ばされ、宸襟を御休め遊ばされ候儀、方今の第一義」と、薩長両藩に引き続いて上京し、天皇の居所である京都を守護することこそ、もつともなすべきことであると説く。

五月二十二日、勅使大原重徳とともに京を発った久光は、六月十四日、老中板倉勝静、同脇坂安宅を訪れ、勅旨奉承に関する会議の席についていた。一方、吉田東洋という政治の軸を失った土佐藩では、政務の基本方針の見直

しを余儀なくされていた。そもそも藩主出立に際し、それが「上京」を含むものなのか否かが未決の状況であった。藩主出立が決定したのは、六月二十日。当初は、三月八日発駕の予定であったが、藩主豊範当人の病と東洋暗殺によって、延期を重ねていた。六月十一日には、議奏中山忠能は、山内家縁家の三条実美に、薩長両藩につき、土佐山内家の上京周旋を孝明天皇が求めており、伏見を「いつ頃出府通行」かと問い合わせている。縁家の三条実美は、すぐさま山内家に問い合させたのであろう。史料が確認できないが、六月二十日、藩主豊範は三条実美に宛てて、滞京は今しばらく見合わせようと思うが、上京のうえ、詳しく直談する旨の書翰を出していることから推察される。実際に、藩主一行が土佐を発つのが、六月二十八日。「四百人ばかりの供廻り」であったという。伊予国川之江（現、愛媛県四国中央市）から、備中国下津井（現、岡山県倉敷市）に渡って、中国路を進み、大坂長堀の藩屋敷に着いたのは、七月十二日であった。ただ、姫路からの上坂中、藩主を含めた大多数のものが麻疹にかかった。入京する可否かも未決であっただけでなく、病も武市らの思いを阻んだ。¹⁸

島津家が縁家近衛家に対し、滞京と国事周旋の勅諭降下のとりなしを依頼、これを獲得しえたように、形式的にも天皇の許しが必要であった。藩是未決の状況を憤った武市らは、随従の執政山内下総を説得、すぐさま京、江戸に使者を赴かせ、縁家の三条家に勅諭降下の幹旋を請うとともに、在府の山内容堂の承認を得る。

三条実美も「議奏衆へ談合」¹⁹しており、八月二十五日、山内下総に対し、滞京警備と国事周旋の内勅が武家伝奏坊城俊克より伝えられた。²⁰これにより、山内家はおける政治運動の許可証を得たこととなる。

3、政治運動の個性としての「天誅」

あらたな政治の場である京都において、だが、そしてどの勢力が、主導権を握るのか、在京大名家臣内の興味の的となっていた。薩長土三藩の均衡並立状況と論じられる文久二年（一八六二）下半期において大名家中の人

物評は絶えることなく、土佐勢においては他に比して、そういえる。

藩主に随行し、在京中の土佐有志、千屋菊次郎が、文久二年九月十九日付で、土佐の父親に宛てた書簡には、「薩長土三藩の中にも天帝には土州を一番の御見込」として、土佐勢の政治的優位性を述べ、「墨龍などは三藩第一の謀主と相成り天下に名をとどろかし申し候」と、「墨龍」、すなわち半平太を随一の政治家であると申し送っている。また、平井収二郎も、手記に「吹山（武市）尤有力」と記す。⁽²¹⁾多少の誇張こそあれ、武市は在京大名家臣を主導する者の一人に数えられた。実際、文久二年下半期、朝廷に提出された藩主豊範の建言書草稿の多くは彼の手により、他藩応接役としても、他の大名家臣を牽引する立場にあった。⁽²²⁾

さて、文久二年下半期における在京の土佐山内勢および武市半平太の政治的位置を裏付ける政治行動として「天誅」を考えたい。「天誅」は、これまであまりにもイメージとして、理解された。徳川公儀を憎悪し、排斥しようとする尊王論者の遺恨的側面ばかりが強調されたすぎたのである。

「天」によって「人」を斬らせることの意味については前述した。吉田東洋を斬ったことによって、藩政を一変させた武市ら土佐有志は、先にみた「人斬り」の公共性的論理を用い、政治運動を展開した。安政大獄において同志を失った復讐心とか、怨念といった通説がある。そのような思いがないとはいえないが、彼らは政治手段として斬ることを選んだ。ただ、あからさまに斬りはしない。万物を支配する観念としての「天」に斬らせる。そして「天」の命に準じて、その首級を晒す。土佐で吉田東洋を斬った折には、「天」は用いられなかった。それは、あくまで人間の所業であった。斬った人間は逃げたが、京坂の政情と雰囲気これをうやむやなものとした。衆人環視の京坂地域において、斬ったのはあくまで「天」である。感のいい市民には、晒されている首がいったい誰に斬られたのかは、ある程度の見当はついていよう。ただし、「天」が斬っているのだから文句はいえまい。学問の需要と拮据りによる尊王論の高揚や、天皇という伝統的權威の存在によって、京都、大坂には、日本近世において独

特の「公論正義」が生成された。

「天誅」とは、人々の心理や思考のなかに芽生え始めた公共的「正義」としての「天」。これに作用するように働きかける「人斬り」を手段とした政治運動の一形態なのである。

表は、文久二年から翌三年にかけて、京都・大坂でおきた「天誅」事件につき、確認できるものを掲げ、対象となった人物、晒された場所、斬奸趣意書の内容を盛り込んだものである。管見の限り、「天誅」という名の「人斬り」は、文久二年七月、土佐山内勢が大坂にやってきてから、文久三年半ばまでのおよそ一年間に頻繁している。

まず、文久二年七月二十一日、九条家家士で、「今太閤」と呼ばれるほど、京で氣勢を張った島田左近が斬られた。彦根藩の長野主膳との政治的連携が「天」より「大賊」と見なされたのである。閏八月二十日、越後出身の浪人で、義拳を企て、土佐の吉村寅太郎とも親交のあった本間精一郎が先斗町で斬られた。元来、弁舌に長け、口うるさい素性が裏目に出たといわれる。「佞辨を以、薩長土之三藩を様々致譏詆、有志之間を離間し姦謀」を企んだので、「天」により討たれ、「梟首」させられた。島田左近を斬ったとされる薩摩の「人斬り」で、武市と「腹中を談じ、兄弟の約」⁽²³⁾を交わした田中新兵衛が、岡田以蔵ら土佐勢に加わったとされる。翌二十一日には、島田左近と同じく、九条家諸大夫の宇郷玄蕃（重国）が「高貴之御方え了簡書も差出、平常暮し方至而奢居不審相立候程ニテ全島田一列之者二而不宜人物」として、九条家下屋敷内にあった自宅を襲われ、斬殺。松原通上る、賀茂川原に晒された。岡田以蔵が斬ったといわれるが、あくまで「天」が斬ったとされた。島田の情報源として働き、高利貸や妓楼経営で儲けた文吉（目明し文吉）が絞殺され、三条河原に晒された。文吉の「種々姦謀」から生じる「穢れ」が、斬ることを躊躇させたといわれる。⁽²⁴⁾文吉の絞殺現場を、武市は見物した。そして、京都町奉行所が下山人探索に躍起になっているとの報を得るも、「下山人探索可笑事」と一笑に付す。⁽²⁵⁾この時期の政治に対する確信が、武市にそう言わしめるのである。

表 文久2～3年、おもな「天誅」（土佐有志の関与が想定されるもの）

人物名	身分	日付	晒された場所	斬奸趣意書
島田左近	地下、九条家家士	文久2年7月21日	四条大橋北側の河原	「此嶋田左兵衛權大尉事、代逆賊長野主膳え同服いたし不謂奸曲を相巧、天地ニ不可容大賊也、依之加誅戮令臯首者也 文久二年壬戌七月」
井上佐一郎	土佐藩士、前監察吏	文久2年8月2日	大坂道頓堀	無し
本間精一郎	志士、越後国郷士	文久2年閏8月20日	四条河原（胴体、高瀬川に投込）	「此者之罪状今更申迄も無之、第一虚喝を以衆人を惑シ、其上高貴之御方え致出入、候弁を以薩長土之三藩を様々致議論、有志之間を離間シ姦謀を相工ミ或ハ非理之貨財を貪取、其外不謂姦曲難尽筆上ニ此儘差置候而ハ無限禍害可生ニ付如斯令臯首者也」
宇郷重国	九条家諸大夫	文久2年閏8月22日	松原河原	「宇郷玄蕃頭 此者島田同腹ニ而主家をして不義ニ令陥入、実ニ其罪彼よりも重し、依之令加天誅者也」
文吉	目明し	文久2年閏8月29日	三条河原	「高倉押小路上ル 目明文吉 右之者先年より嶋田左近え随従し種々姦謀し手伝致し、剩去ル子年以来姦吏之徒ニ心を合、諸忠士之面々為致苦痛非分之賞金貪取、其上嶋田所持之不正之金子を預り過分之利益を漁に、近來ニ至而は様々姦計を相巧、時務一翻之妨ニ相成候ニ付、如此誅戮を加ヘ死骸引捨ニ致し同人死後ニ至右金子借用之者ハ決而不返済此、以後ニ而も文吉同様之所業相働候者有之ニ於而ハ其身分之高下ニ不抱即時ニ可令誅伐者也 文久二戌九月」
渡辺金三郎	京都西町奉行瀧川播磨守組与力	文久2年9月23日	粟田三条刑場	「年増世上ニ佞曲邪業等之者多、右は御国体之障リニ付、既ニ於京都四五輩令罪科者也、其外所業之品は替り候得共、就諸事悪業之者不少、太平之蒙御国恩安居之難有を不弁、却而私欲之邪業ニ致増長吏ニ此儘捨置候而は全国有志之時勢一新之妨ニ相成、依之敵數遂内索見当り次第其席へ踏込無用捨即時ニ可令刑罰もの也 戌九月」（ただし、大津市中4、5ヶ所への落文）
上田助之丞	京都西町奉行所瀧川播磨守組同心			
森孫六	京都東町奉行所永井主水正組与力		手負にて逃走	
大河原重蔵	京都東町奉行所永井主水正組同心		粟田三条刑場	
平野壽三郎	商人、相国寺門前	文久2年10月10日	二条橋北河原（天誅未遂）	「相国寺門前 平野屋壽三郎 鞍馬口煎餅屋半兵衛 此者事、数度重キ御方関東え下向ニ供内ニ加リ上長者町島丸西入南側桶屋市蔵と心を合せ宿タニ於而無理非道ニ莫大之金錢貪り候故容易ならざる迷惑なただし、生晒（天誅未遂）
煎餅屋半兵衛	商人、鞍馬口			
多田帯刀	金閣寺侍、母は村山可寿江（タカ）	文久2年11月15日	粟田口三条	「多田帯刀義、嶋田左近・加納繁三郎・長野主膳ト互ニ奸謀相働第一戌午年ニ至り有志之往々書翰令開封、渡辺金三郎ニ相渡候事歎欣いたし、憂国赤心之者共一時天地を拂ふニ至而其罪惡ニ天地不可容、其餘逐一白状不枚挙、仍而其一端を挙加天誅もの也」
村山可寿江（タカ）	芸妓、井伊直弼、長野主膳の妾	文久2年11月15日	三条河原ただし、生晒（のち尼僧へ）	「村山かすへ 此女永野主馬妾として戌午已來主馬へ奸計を相助稀成大胆不敵之所業有之、不可赦罪科候得とも、其身女子たるを以面縛之上死罪一零減之、尤かすへ白状ニ依而奸吏之名目一々記之畢、尚此上其致方再応遂吟味、右奸吏共遂一可加敵刑者也」

人物名	身分	日付	晒された場所	斬奸趣意書
池内大学	儒者、青蓮院宮・知恩院宮侍読	文久3年1月23日	大坂大川難波橋	「池内大学 此もの従来高貴の御方々之恩顧を蒙り戊午之比正義之士ニ随ひ種々周旋いたし居候処、遂ニ反覆いたし、姦吏ニ相通し、諸藩誠忠之士を数多斃し、苟も自ら免れ其罪惡不容天地、依之加殊戮令梟首もの也」
香川肇	千種家家士	文久3年1月28日	七条河原のち、首は徳川慶喜宿所の東本願寺へ、両腕は、岩倉、千種屋敷に投込	「此者、和宮御縁組一件ニテ諸司代若狭へ周旋之奴也、天罰可恐」 慶喜宿所への投文「攘夷為血祭献上仕候」
姉小路公知	堂上公家(羽林家)、国事参政	文久3年5月20日	禁裏御所、猿が辻付近	無し

出典：「近衛忠熙家記」文久2年7月22日条、「万国一洗記」文久2年9月1日条、「天津詰探索田村五百代探索書」文久2年10月2日付、「編年雑録」18、文久2年10月11日条、「文久壬戌筆記」文久2年11月15日条、「万国一洗記」文久2年11月条、「隆祐卿手録」文久3年正月29日条、「文久戊亥雜記」文久3年2月2日条(すべて「大日本維新史料稿本」、瑞山会編「維新土佐勤王史」、小寺玉見「東西評林」、同「東西紀聞」)

翌文久三年(一八六三)正月、大坂難波橋の上に、さらし首があった。医術を生業とする傍ら、青蓮院宮、知恩院宮の侍読を務めた京都屈指の儒者池内大学(陶所)の首である。青竹三本で刺し貫かれた首に掛けられた制札には、「戊午(安政五年)之比正義之士ニ随ひ種々周旋いたし居候処、遂ニ反覆いたし、姦吏ニ相通し諸藩誠忠之士を数多斃し、苟も自ら免れ」たことを「天」が許さず、殊戮を加えるとの斬奸趣旨が記された。

池内大学は、安政四年(一八五七)、通商条約勅許問題や將軍継嗣問題が京中において議論されるや、一橋家当主、徳川慶喜を擁立する諸侯グループ、いわゆる一橋派の側にたち、宮廷社会との人間関係を活かした積極的な政治行動をとったが、翌五年、徳川公儀による肅清が始まり同志であった学者や志士が捕縛されていくのを尻目に伊勢へと避難するも、京都に舞い戻り、京都町奉行所に自首。江戸に檻送されたのち、一連の政治行動を供述し、安政六年、江戸、京都を所払い(追放)となった後、大坂の今橋筋心齋橋あたりに籠居していた。文久三年正月二十三日、江戸から上京途次であった土佐前藩主山内容堂より旧交を温めようと酒宴に招待され、その帰りに、自宅付近で斬殺された。この他、金閣寺侍多田帯刀、芸妓村山可寿江(タカ)、千種家家士賀川肇ら、「天誅」という名の「人斬り」の対象となった人々は、安政五年の京都にて展開

された安政大獄を推進し、井伊直弼およびその腹心長野主膳との密なる関係を有した人間であるといえる。

先行研究、さらには膨大にある一般向けに書かれた幕末維新関連の書籍においても、安政大獄において同志を奪われたことへの私怨的な復讐心であると述べる。また、「天誅」という政治行動が止むことを知らず、この後、頻発するという理解²⁶についても、「天誅」という名の「人斬り」と、慶応三年（一八六七）十一月の坂本龍馬、中岡慎太郎両名の暗殺などに見られる事件が同様に解されているからである。

以下、在京土佐勢の政治動向と文久二、三年の京都政情と関わらせ、「天誅」が政治的にいかなる意味があり、これが政情の影響を受け、いかに変質していたのか考える。

一つ目に、文久二、三年段階での安政大獄のイメージについて。安政大獄は、大名家だけでなく、公家社会にも、ひいては町衆にも、歴史のトラウマとなつてイメージされ、大獄に関与したものは、「正義」を汚す公の姦人であると当然のごとく認識されていた。文久二年四月段階において、老中久世広周が上京予定との報は、公家社会、特に大獄で処罰された人間において、まさに「第二の安政大獄」を予感させうるものであった。²⁷ 島田、宇郷をはじめとする大獄関係者への攻撃はすなわち、京都で暗に形成された世論に、その政治勢力が正しいと判断させるのに十分、事足りた。

二つ目に、安政大獄の主体となり、江戸城桜田門外で死んだ井伊直弼および彦根藩井伊家の文久二、三年における政局上の位置づけについて。井伊家は、文久二年半ば、未曾有の危機に瀕する。同年に執行された徳川公儀の諸制度改革（新兵制、教育、職制）の仕上げとして、公儀側がすこぶる慎重に執行したのが、桜田事変後における公儀内諸有司の処罰と安政大獄および桜田事変関係者の大赦事業である。公儀内においては、久世広周、安藤信正両老中や、京都所司代酒井忠義に領地削減などのペナルティが課せられたのはじめ、在職中の老中、奉行に謹慎・隠居・差控などの公職罷免措置が決定された。²⁸ 井伊家については、「掃部頭在職中品々不届の処置に及び、それが

為今日朝廷に対して申上ぐべきようなき不都合を醸したとして、文久二年十一月二十日には、領地十萬石の削封が決定されている（ただし、井伊家中の反対および歎願運動もあり、慶応元年段階まで未決⁽²⁹⁾）。

これより先、同年八月二十七日、「悪」と見なされた政治体質の改善おこなうべく、彦根藩主井伊直憲は、幽囚中であった長野主膳を斬罪、家老木俣清左衛門、同庵原助左衛門に致仕・謹慎、側役宇津木六之丞を禁固に処した。加えて、翌閏八月二十日、近世初期より同家のプライドとなった職務であった京都守護の職掌が剝奪され、職制改革にともなう新職、京都守護職に会津藩松平家の補任が決まったことは、大名家自体のポリシーのみならず、存在意義すらも否定されうる事態となった。このような、言うなれば、瀕死の大名家組織に対する世評は厳しく、井伊家は「死にかけのメダカ」にたとえて、「ヒクヒクして居る」と評され、また「藩士文武ともニナシ、茶湯猿楽ヲ楽ム、又利ニフケル」と、藩政を動かす人材はなく、芸事ばかりにふけり、自己利益のみにはしるきらいがあるとイメージされていた⁽³⁰⁾。

このような安政大獄の「悪」評と、危機的な状況である井伊家という存在は、「志士仁人」の躍動の場としての京都・大坂という「志士」的公共空間においては、格好の材料となった。それは現状の政治運動において、直接的な障害になりえるものではなかったが、政治勢力としてのありかたをより正当なものへと近づけるために、彼らに「天誅」という名の「人斬り」をほどこしておくことこそが、もつとも有効な政治手段と認識されたのである。斬殺後、衆人環視の前にさらしおくのは、すなわち、悪人とされた人間の見せしめというよりもむしろ、それをおこなった勢力がいかなる勢力であるかを、それを直接見るものに、または伝え聞くものに、推理させ、暗黙のうちに認識させるためである。それこそが、世情が認めうる政治的正当性の獲得につながると認識されたからにほかならないのである。

これを手がけていたであろう在京の土佐藩勢力は、文久二年半ばから、三年上半期にかけて、武市半平太を中心

に公家との政治関係の面、在京大名家間における政治主導の面において抜きん出た存在となった。むろん、武市自身も政治手腕や、山内家の縁家として、宮廷社会のなかでもっとも勢いのあった公家、三条実美の存在を否定するものではない。しかし、文久二年から三年にかけての在京土佐山内勢の政治的浮沈には、吉田東洋暗殺以来、折をみておこなわれてきた「天誅」という名の「人斬り」が大きく関係したのである。

4、「天誅」という名の「人斬り」の限界

政治のなかにおいて重要な意味を持った「天誅」という名の「人斬り」は、ある暗殺事件によって、その政治的有用性を失ってゆく。

文久三年（一八六三）五月、三条実美とともに、攘夷別勅使として江戸に赴くなど、急進派公家の中心人物と目された堂上公家姉小路公知が禁裏御所の北東角、朔平門外猿ヶ辻で斬殺された。築地塀の上部には猿のレリーフがほどこされ、鬼門の方角（北東）から禁裏に入る邪気を祓う場所であったのだが、まさしく姉小路がその邪気をかぶる形となった。下手人は三名であつたとされるが定かではなく、現場に薩摩藩士所用の鞆が落とされていたことから、田中新兵衛に容疑がかかり捕縛、憤慨した田中は京都町奉行所で自刃した。この事件には斬奸趣意書は存在せず、さまざまの憶測が飛び交うなか、その責任は自刃した田中新兵衛に転化された。これでは「天」が斬らせたという理由付けはなりたたない。この「人斬り」事件は、姉小路公知という当時、気鋭の公家の命を奪っただけでなく、京都における薩摩藩島津家の政治的存在意義すらもうやむやのうちに奪い去る形となった。

ここにおいて「天誅」という名の「人斬り」は、大名家間の殺伐とした政治的駆け引きにおいて、相手を追い落とすための手段として解釈された。また、姉小路暗殺事件に際して、学習院門前に「転法輪三条中納言、右之者姉小路へ同腹二而公武御一和ヲ名トシ実ハ天下之爭乱を好候者ニ付、早速辞職隠居不致おいてハ不出旬日代天誅可令

殺戮者也」^③との三条実美への斬奸予告状が貼り付けられたことにより、公家社会内における自衛意識を高まり、三条実美を総督とする親兵制度の具現化が急がれるとともに、大名家による禁裏および御所九門の警備が開始された。徳川公儀、朝廷という公権力による治安維持のための統制が加わり、「志士仁人」が抱きうる「志士」的公共性は抑圧され、「天誅」という名の「人斬り」が、あるべき政治手段として選択しえない状況となつたといえるのである。

さらに、三ヶ月後、文久三年八月十八日の政変が勃発する。政局において、失脚したのは長州藩毛利家勢と三条実美ら数名の急進派公家。かたや復権したのは姉小路公知殺害により嫌疑を受け、京都警備の任を解かれた薩摩藩島津家と、京都における徳川公儀の権威を取り戻した会津藩松平家ということとなる。

政変の余波は、土佐勤王党を含む在京土佐勢にもおよぶ。長州と行動に共にするもの、また吉村寅太郎のように大和国で義挙を企て、決行するもの、藩内急進的分子の檢挙・摘発を受け、帰国、入牢を命じられもの。武市は土佐有志の代表として、藩政府の判断に対し、強行に反論するも、文久三年九月二十一日、入牢を余儀なくされた。

以後、武市半平太ら土佐有志は、長きにわたる過酷な尋問・拷問による弾圧を受ける。獄中、約一年半余。慶応元年（一八六五）閏五月、武市は、「人心煽動」「上威輕蔑」を理由に切腹を命じられた。^④土佐有志によって主導された土佐山内の政治姿勢は真つ向から否定され、武市らの抱いた「天」と彼らとの関係によって生成される公共性、これに政治正当性を付与された彼らの「志士」的政治運動はつひえなこととなつたのである。

5、その後の「天誅」

文久三年八月十八日の政変後、長州毛利勢をはじめとする「志士」的政治運動が、治安維持の面から禁止された。同年九月四日、在京大名二十四家に対し、朝廷より京都市中の警備を厳化せよとの命が出た。そして、毛利勢や共

に長州に落ちた三条実美ら急進派公家によつて企画され、大名家の兵士提供により成立していた親兵制度も九月七日に廃止された。

毛利家の退京後、同家処分の問題、諸外国との通商問題をふくんだ国是を京都において審議しようとの試みがなされた。島津久光、松平春嶽、伊達宗城、松平容保そして山内容堂と、将軍後見職の徳川慶喜は朝廷政務の運営機関たる「朝議」への参予が許可され、新たな国是審議にかかったが、元来、徳川公儀側に、諸大名勢力の政治介入を容認する意思はなく、元治元年（一八六四）三月、わずか二ヶ月あまりで解体された。徳川公儀執行部、いわゆる幕閣は、諸大名家の代表たる久光、容堂らを政治の場から遠のけて、京都政情の独占をはかったが、徳川慶喜は三月二十五日、朝廷より禁裏守衛總督並摂海防御指揮に任じられ、京都において新たな政治的スタンスで、朝廷を取り込みうる徳川公儀の制度的ありようを模索していた。既存の京都警備勢力であつた京都守護職の会津松平、元治元年四月、新たに京都所司代に任じられた桑名松平を政治的に取り込み、天皇、公家社会の絶大な支持のもと、京都、大坂を徳川公儀のあらたな政治拠点にせんとする取り組みであつた。「一会桑」政権ともいわれる、元治元年四月以降の徳川慶喜を首魁とする京都の徳川公儀の政治秩序は、京都市中警備の制度化、組織化の面からもうかがいえる。

鞍馬口から丸太町、鴨川から室町までの区域を徳川慶喜の一橋家が管轄、丸太町から蛸薬師、鴨川から御土居までが京都所司代（桑名松平）、松原より九条通、鴨川から御土居までが幕府歩兵組、鞍馬口から丸太町、室町から御土居までが京都守護職（会津松平）、蛸薬師より松原、鴨川から御土居までを新選組がそれぞれ担当することになった。³⁴新選組や幕府歩兵組を活かし、ペリー来航以来、もつとも制度化された京都守衛体制が構築された。

このような、権力の寄り戻しともいえる徳川公儀の暫時的な指導力の強化にともなつて、「志士」的公共性は完全に抑圧され、「斬る」こと自体が政治手段として選択しにくくなつた。「志士」的公共性によつて生成された政治

運動は、斬奸状を送りつけたり、門前に貼りつけたりして、その対象となっている人間を威嚇することに方向転換されたといつてよい。

文久三年十月、江戸において、石谷因幡守穆清への「天誅」が予告された。石谷は、嘉永五年より安政元年まで大坂町奉行を勤め、安政五年、大獄の折には江戸町奉行として、捕縛された志士への尋問、特に長州の吉田松陰の取調べにも関わったことでも知られる。予告状には、石谷が井伊直弼と通じて政治を混乱させ、京都なら、「首をも刎可捨候処」であるが、「去秋以来追々及誅罰」すでに「事済」となっているので、江戸においては暫く猶予を与え、「一同之首預置」と書かれていた。³⁵石谷は元治二年（一八六五）正月より慶応二年十一月まで、講武所奉行を務めることになるので、実行されていない。また、昨秋より京都でおこなわれており「事済」であると、もはや使い古された感も見受けられる。

「天誅」が事済になっているとされた京都においては、文久三年十月二十七日、京都守護職松平容保に対する「天誅」予告状がしたためられ、市中に貼紙がなされた。容保が「重職を蒙居ながら正義丹心の族家臣に一人も無之」また薩摩藩による「愚弄」に甘んじ、徳川公儀の危機を醸していることは、「井伊安藤の故智を襲」うにすぎず、甚だ不届きである。有志一同にて申し合わせ、「天誅」を加えるべきところであるが、「東照宮血脈の家に有之」ので赦免する、とある。すなわち「天誅」という言葉を使った、京都守護職たる会津松平に対する現行の政治批判となっているのである。また、末尾には「向後改心実意を以て為皇国粉骨碎身の御奉公可有之事」と、激励ともとれる一文が添えられる。³⁶容保自身も作成者を追及することなく、これを意に介することはなかった。また、同時期には、薩摩藩京都屋敷にも八月十八日の政変以来の薩摩藩の政治動向を批判し、「中川狸宮・会津狐」と謀り、「正義忠誠之方々を相退ケ」とことを言後同断の振る舞いとし、本来ならば「天誅」を下すべきところ、「尊皇攘夷之道ヲ今一際御周旋」するよう求める投書が投げ込まれている。³⁷

「狸」と評された中川宮朝彦親王は、当時、世評が芳しくない。文久三年十二月、邸宅への貼紙には、会津と謀る中川宮は「三千石之私欲より会津に与し、仮に兄弟の約を結び、陰謀相工」⁽³⁸⁾ んでいると評され、「天誅」の対象となっている。末文で、「正義之方々速ニ被逐奏聞」ように、中川宮の禁裏内における周旋を求めている。

この他、文久三年後半以降、江戸、京都、大坂においては、「天誅」予告状が作成され、徳川公儀役人や公家衆、さらには都市の富裕層に対して威嚇行為がなされる。これら行為は「人斬り」を想定したものではなく、その対象者への訴え、歎願の形態となっている。これにに対し対象となった人間がさしたる策も講じていないことはすなわち、このような予告状を作成し、市中、門前に貼り付けることが、もはや世情におけるブームとなり、それが日常化、一種の娯楽化していると認識されているからである。⁽³⁹⁾

元治元年（一八六四）四月、大名諸侯の上京をとまなう大名家のあからさまな政治運動が徳川公儀より否定され、禁裏守衛総督たる徳川慶喜の指揮のもと、治安レベルが上げられた京坂地域において、「天誅」という言葉に対する危機意識は薄れ、言わば「バチがあたる」という身近な言葉で説明できうるような、「人斬り」・「斬殺」とは異なる次元の政治手段へと変容していったのである。

むすびにかえて

「志士」と呼ばれた人々の行動論理を解明するため、土佐藩有志の政治行動のなかにおける「天誅」という名の「人斬り」について考察した。本稿で述べた「志士」的政治運動は従来、「倒幕」が想定されて考察がなされ、その内実が論じられてこなかった。論拠として使用したような瑞山会編『維新土佐勤王史』などは、武市瑞山の顕彰を意図して編まれた伝記であり、顕彰のために弊害が生じるような内容は削除されている可能性が高い。編纂意図

をふまえれば致し方ないのかもしれない。ただ、土佐藩山内家に関しては、明治維新史研究における重要性に反して、史料の伝存状況に不明な点が多く、研究業績も決して多くはない。おそらくは、日本近代における土佐から出た政治家が、その政治的正当性を得るため、非常に限られた事象、事物に対する「歴史」を恣意的に編纂し、わが郷土の誇りとして、称える風潮があつたためであつた。このような史料的制約のなかで、これまで「志士」的政治運動の内実を解くことこそ困難極まりなかつた。

ただ、そのなかで「天誅」という名の「人斬り」は、格好の素材となつたと認識している。「人斬り」を要した政治運動に公共性の枠組みをもちいたことは、史料的制約と時代認識へ固定観念というベールがかけられた状況で論じうる、一つの可能性であると考ええる。

註

(1) 瑞山会編『維新土佐勤王史』九頁、富山房一九一二年初刊、マツノ書店二〇〇四年復刊。以下、『維新土佐』と略す。

(2) 筆者が「志士」を研究素材に取り上げるきっかけとなつたのは、丹波国の名もなき郷土湯浅五郎兵衛関係史料（日吉町郷土資料館蔵）との出会いであつた。湯浅五郎兵衛については、拙稿「志士と由緒 丹波郷土湯浅五郎兵衛と幕末政治をつなぐもの」(青山忠正監修『湯浅五郎兵衛と幕末維新』日吉町郷土資料館、二〇〇五年)を参照のこと。

(3) 高木氏の多くの研究業績のなかで、志士について論及した明治維新史研究を掲げる。『明治維新草莽運動史』

(4) 平尾道雄『土佐藩 吉川弘文館、一九六五年』
(5) 平尾道雄『天誅組烈士吉村虎太郎』二二〜二三頁、大道書房、一九四一年。
(6) 武市半平太(瑞山)の人物史については、入交好脩『武市半平太』(中公新書、一九八二年)があるのみである。ただし、史料引用および解釈については参考とならない。以下、『武市半平太』と略す。

(7) 『武市瑞山関係文書』一、三六〜三七頁、日本史籍協会一九二九年初刊、東京大学出版会二〇〇三年復刊。以下、『武市文書』と略す。

- (8) 吉田常吉・佐藤誠三郎校注『幕末政治論集』一四八
 ～一五四頁、岩波書店日本思想体系一九七六年、維新史料編纂会編『維新史』二、七三一～七三二頁、明治書院一九四〇年初刊、吉川弘文館一九八三年復刊。
- (9) 「天」觀念に関する思想的知見については、関口順『儒学のかたち』（東京大学出版会、二〇〇三年）より得た。
- (10) 桜木章『側面觀幕末史』一、三三一～三三二頁、啓成社一九〇五年初刊、東京大学出版会一九八二年、続日本史籍協会叢書として復刊。
- (11) 平尾道雄『吉田東洋』吉川弘文館人物叢書、一九五九年。
- (12) 『武市文書』一、六二頁。
- (13) 同右、七一頁。
- (14) 拙稿『幕末期薩摩藩島津家と近衛家の相互的「私」の関わり―文久二年島津久光「上京」を素材に―』（『日本歴史』六五七、二〇〇三年所収）。
- (15) 『武市半平太』七三～七四頁。同史料は、この時期の大名家内の政治意識として極めて重要であるにもかかわらず典拠となる史料が管見の限り不明である。これは、入交氏の史料引用が不適切であることからくるものであるが有用と判断し、あえて引用した。今後、原史料の追求に努めることとする。
- (16) 『維新土佐』、一四五頁。
- (17) 『維新土佐』、一五一頁。
- (18) 平井収二郎の手記にも「文久壬戌夏六月廿八日、君上御発駕、陪從、七月十二日浪華、同十三日より八月廿二日迄在浪華、当時麻疹流行、從者三十歳以下、無不病氣矣、君上亦憂之、収（平井）幸免焉。自大臣至隸皂、疾疹者殆二千人、死者不充日」（『限山春秋』、『史籍雜纂』二、三三七頁、日本史籍協会一九二二初刊、東京大学出版会一九七七年復刊）とあり、大坂周辺地域での麻疹流行を示す。
- (19) 山内容堂宛て三条実美書翰（文久二年閏八月八日付、『維新土佐』一五八～一五九頁）。
- (20) 『公純公記』文久二年八月二十五日条（『孝明天皇紀』三、一六七～一六八頁、平安神宮一九六八年）。『維新土佐』はこの内勅が関白近衛忠熙より下されたとされる。勅諭のような朝廷内公文書の武家への授受は武家伝奏を通じてなされる。近衛関白より、天皇内々の沙汰が坊城伝奏に渡され、屋敷に持ち帰った坊城が、山内家に授けたと考えるほうが適當である。
- (21) 『限山春秋』（『史籍雜纂』二、三四一頁）。
- (22) 在京土佐山内勢の政治主導については、拙稿『幕末期公家の政治意識形成とその転回―三条実美を素材に―』（『佛教大学総合研究所紀要』八、二〇〇一年所収）において、三条家との関わりなどから検討した。
- (23) 『武市瑞山在京日記』八月十八日条（『維新土佐』付録、五頁）。
- (24) 五十嵐敬之「天誅見聞談」（『武市文書』二、五四七～五五四頁）。
- (25) 『武市瑞山在京日記』閏八月十八日条（『維新土佐』付

録、一〇頁。

- (26) 近年のものでは、井上勲「開国と幕末の動乱」五〇
頁、五二頁、六三頁（同編『日本の時代史二〇 開国と幕
末の動乱』吉川弘文館、二〇〇四年所収）。

- (27) 註14に同じ。

- (28) 『続再夢紀事』一、二一九～二三五頁、日本史籍協会
一九二一年初刊、東京大学出版会一九七四年復刻。

- (29) 宮地正人「幕末彦根藩の政治過程」（佐々木克編『幕
末維新の彦根藩』彦根城博物館叢書一、サンライズ出版
二〇〇一年）。

- (30) 小寺玉晃『東西評林』一、一〇二～一〇八頁、日本史
籍協会一九一六年初刊、東京大学出版会一九七四年復刻。

- (31) 小寺玉晃『東西紀聞』一、六三〇頁、日本史籍協会、
一九一七年初刊、東京大学出版会、一九六九年復刻。姉
小路殺害に関して情報はさまざま。下手人を津藩藤堂家
臣「斎田何某初三人」、指示したのは「深キ遺恨有之」
滋野井公寿・西四辻公業とする風聞情報も存在する。

- (32) 『東西紀聞』一、五四六頁。

- (33) 『武市文書』二、二五八～二五九頁。

- (34) 宮地正人『歴史のなかの新選組』五三～五八頁、岩波
書店、二〇〇四年。

- (35) 「癸亥新聞志」文久三年十月、石谷因幡守ニ対スル張紙、
東京大学史料編纂所蔵「大日本維新史料稿本」所収。以
下、「稿本」と略す。

- (36) 「磐鍬録」文久三年十月十八日条、「稿本」所収。

- (37) 「投書 薩邸へ」文久三年十月、「稿本」所収。

- (38) 「中川宮門張紙」文久三年十二月六日条、「稿本」所収。

- (39) 江戸和田倉門に張られた老中板倉勝静への斬奸予告状
には長州毛利を愚弄し、横浜開港を薦めたとして「掃
除」とあるが、「児島徳郎・名和誠太郎」との署名
がある。（小寺玉晃『甲子雜録』一、二九三頁、日本史
籍協会一九一七年初刊、東京大学出版会一九八四年復
刻）。

※本稿は、文部科学省科学研究費補助金（若手研究B）によ
る研究成果の一部である。

